

# 佐啓

ゆうけい

発行 者

社会福祉法人 佐啓会  
理事長 黒見 吉英

〒290-0265  
千葉県市原市今富1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

おぼらだーに

松田 源次

二月初旬、田舎から新ジャガが届いた。この時期に？と思うかも知れないが、そこは亜熱帯海洋性気候の土地柄。赤土で育ったジャガイモは美味であり、今では地域の特産品になっているらしい。私が住んでいた頃はサトウキビの栽培が主流であったのだが、...。なにはともあれ、早速お裾分けすると近所の評判の良さに驚いた。実家に報告し、また送ってくれと頼んだ。今度の収穫は秋になるらしい。その他にもバイナップル、バナナ・マンゴー、みかんなどが時期はずれに届く。どれも実家で栽培したものである。

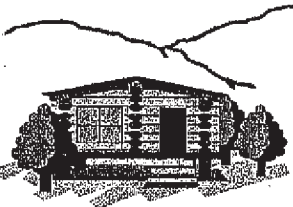
もあえて危険を冒す必要も無かったというところなのだろう。人間のやる事は時と場合で自然に多大な影響を及ぼす。外来種の侵入によって在来の生態系に影響が出ていくところはここだけではない。一つ間違えれば取り返しがつかないというのを肝に銘ずるべきである。ちなみに、観光スポットであった「ハブとマングースの戦い」は動物愛護の観点から実施不可能となったらしい。

一方、この南西諸島海域は台風銀座とも呼ばれ、勢力が強いまま接近や上陸をする。四十メートルを超す暴風雨が一日以上続くことも多い。その為、接近の報を聞くとか家の窓という窓を板で打ちつけ対策を講じる。関東地方と違いこんなことが何度もあるのだ。最近やたらと大変化しているのも地球温暖化の影響とか。



私が小さかった頃は、耕地面積の大部分でサトウキビ栽培が盛んに行われていた。収穫期ともなると借り出されたが取りがまた重労働で、一本ずつ刈り取り、束にして人力で運び出すのである。この単純作業の繰り返しでフラフラになってしまふのだが、ここはハブの棲家でもあり気を許すことは出来ない。目の前でとぐろを巻いて反撃にあつたら大変なことになる。被害を受けた人を何人も見てきたので恐怖はいつも頭に残っていた。「足や大事などころをかまれた」と思った瞬間に目が覚めるといってたことが何度かあった。今でもこの夢は時々見る。

学校の休日はいくつした野良仕事や園牛の世話で自分の時間もなくなる。貧乏暇なしだった。島での生活は高校を卒業するまでの十八年間であつたが今でも鮮やかに思い出す。



館山道をくぐると、植栽に囲まれた駐車場の先に、「ふる里学舎」や「ふる里学舎」が見えてくる。ここから右に進むと下刈りをした山あいに緑の屋根と肌色のロジ風の建物が、新たな事業所のきせつ館である。

定就労継続支援(日型)事業所を合わせた、多機能型としてこの三月に竣工した。

四月十二日の竣工記念パーティーでは「多忙のところ千葉県健康福祉部障害福祉課の安藤課長・竹井前課長・佐久間市原市長などを始め平素ご指導を頂いている二三名の各列席を頂いた。本事業所の大きな目的は一人でも多くの利用者が社会参加できるように一般就労支援を積極的展開する一方、企業等の雇用が困難と判断された利用者についても福祉的就労の場としての機能を確保することにある。

ふる里学舎ではこれまで毎年十名程度の利用者が一般就労を果たしてきたが、来賓の皆様からのお祝いのメッセージやお言葉を受賞する中、本事業所の果たす役割やその機能をしっかりと認識し、期待に応える運営ができるよう誓った次第。

さて、ふる里学舎きせつ館オープン間もなく一名が一般企業へ就職した。過去に就労経験があるが離職後から引きこもりになり在宅生活が続いていた。その後、他の障害福祉サービスも利用してきたが長続きせず、行政を通じてふる里学舎地域生活支援センターに相談があり支援が始まった。

幾度かの家庭訪問を経て何とが通所できるようになったが今度は「利用料が高いからばかばかしい、通所しない」等の理由でしばしば休みがちであった。もともと本人やその家族も就労を希望していたこともあり、また周囲の利用者が次々と就職していく姿をみて本人も気持ちが固まっていたようである。個別支援計画に則った具体的な道筋はもちろんのこと、タイミングや本人を取り巻く環境設定が如何に重要であるか改めて考

えさせられた。

現在、千葉障害者職業センターが主導する当法人所属の第一号職場適応援助者(ジョブコーチ)がフォローアップに入っているが、勤務状況は順調で仕事ぶりも丁寧である。会社からの評価を得ている。

これからは、一般就労に向けた支援体制を継続していくうえで行政やハローワーク、千葉障害者職業センター、障害者就業・生活支援センターなど各関係機関と緊密に連携し、「二人ひとりを尊重し、いかにニーズに応えていくか」という基本姿勢を念頭にいただいた施設支援に努めたい。

島を離れて三十年経つた今も望郷の念は薄れることは無い。島内で仕事につくことは厳しい。若い人たちの殆どが島を離れる。私も同様に家族と離れる道を選んだ。「おぼらだー」は他之島の方言で「ありがとう」。千葉に来てからは、多くの人達に助けられた。故郷の家族からも毎年欠かさず、島の産物が届く。今でも気にかけてくれていることがうれしい。人はこうして支えられていることを忘れてはならない。

見ず知らずの土地で生活が出来ることに感謝し、ここで少しの恩返しができるかと思っている。「おぼらだー」

(ふる里学舎きせつ館施設長)



久々に酒飲を下げた。四月十八日、付け直新聞の一面。上坂冬子氏の「若いの一喝」

ここで指摘されているのは法の解釈と運用と運用の取り違えである。個人情報保護法に対する役所の対応や入学・入社試験で家族環境などを聞くことができないことに対して疑問を呈している。人間が育つ環境を確かめずして実像がわかるものではない。親の職業を聞いてはナラヌなどとは針ほどの事実を九太本棒ほどに解釈した時大憲法的法の運用だ。と氏は主張する。

学校教育法の改正によって準学校が随分特別支援学校に名称変更されることに異議を唱えた難産連盟の動きに「差別用語(『弱者』)と言ひ改め、それをまた「障がい者」と言ひ改め、うしろに、さらに「耳が不自由な方」と言ひ換えたりしたわけだが、呼び方に誤りがあるわけではあるまい。耳の聞こえない人に向かつて差別用語を使つたといふれば、問題はその下劣な品性にある。これをたまたま直すとどうから始めれば決着はつかぬ。(傍線筆者)

言い方を換えても実態が変わらなければ意味が無いことを痛烈に批判している。同時に今まで大事に培われてきたものを失う危険も孕んでいる。

経済の逼迫に伴う改革の波、法制度の見直しも良いが、崩壊としもせずに上塗りしているように感じてならない。

求人に対し、男女も年齢も不問と書面に記されるようになった。雇用機会均等法になったように見えるが現実にはそう簡単に変わりはしない。かえって、無駄な交通費と時間を使い形だけの面接を強いられることになっていまいか。





今年も厚生労働省に新たな採用された方の研修を受け入れました。四月八日から十一日まで施設に泊り込んでの研修で、何を思ったのか、感想をお願ひしました。

寺谷 俊康

私は、厚生労働省に入る前の四年間を救急・集中医療の医師として過ごしてきました。急性期の医療を通して、人間の生死に関わる仕事はともやがたいもありプライドをもって仕事をしていました。しかし、一方で医療は急性期の入院治療のみならず、外来や訪問医療を含めてこそ意味を成すものであり、また人間を救うということは医療だけでは完結するものではなく福祉や介護を含めてこそという思いがありました。目の前の患者を救うことは当然、貴い行為なのですが、別の立場から人間を救いたいという気持ちがあり、厚生労働省に入省したのです。

今回はふる里学会を中心として、福祉の実験の一端を感じることができました。ふる里学会およびグループホームなどの利用者のびのびとした様子、それを支える職員の士気の高さにまず感動しました。また、他の福祉施設や、アネッサデイセンター、アビタ作品展、特例子会社の古河ニューリフを見学させていただき、地域との連携や制度の整備を通じて福祉を多角的に捉える重要性を痛感しました。里見理事長や松橋係長の尽力によって様々な施設を見学させていただき、大変に勉強になりました。

しかしそれと同等に、合同合間て話してくださる生々しいエピソードが私にとって大変興味深いものでした。つくづく自分の仕事は人間が人間にする仕事ということに再認識いたしました。手強さはあるもののやりがいや感動が多い一生をかける価値のあるものとの思いを強くすることができました。実は臨床医を辞め、国家公務員の立場となったものの、本当に人が救えるのだからかという不安をいつも感じていました。この研修を通じて、「そんな事はない。やるべきことはたくさんあるぞ。頑張れ！」と背中を押してもらった気がします。

行政官としてはまだまだ未熟です。これからのキャリアを積み重ねる上で、今回のふる里学会での経験は決して忘れてはいけない原点として位置づけるつもりです。もし、将来福祉行政に関わることができたら、日本の福祉を良くしていく仲間として仕事を一緒にすることができたら幸いです。行政官として成長し、自分の仕事を通じて日本の福祉を充実させていくことを誓い、お礼に代えさせていただきます。本当にありがとうございました。



機微にふれる日々

行場 貴子

二十年度がスタートして、二ヵ月が過ぎました。今年度は文京区からの委託事業も三年目となりました。無我夢中の一年目、少しずつ余裕が出てきた二年目、そして今年度は、三年目という節目の年を迎えました。お陰様で、大塚、

小石川河作業所とも、利用者、保護者の皆様を始め、障害者福祉課など関係機関の方達の温かいご協力、励ましに支えられ、順調な日々を重ねております。先日、年間行事の一つの日帰り旅行がありました。当日はあいにくの雨でしたが、観光場所では、何とか傘をささずに歩くことができて、楽しいひと時を過ごしました。あしががらフラーパークでは、時期が若干早かったのか、メインの藤棚は五分咲きでしたが、点在する藤は色とりどりに咲き誇り、妖艶な花の美しさを堪能しました。花巡りをしていると、一人の利用者が「私、藤の匂知っていますよ」と言い出しました。「エー、歌ってみてー」「ウン、フジは日本一の花よー」一同一瞬、キョトンした後、大爆笑。側にいた観光客にも大いに受けました。フジ造りでしたが、日本一の藤の花にはびつたりの順で納得させられました。フジの唄に端を発して、「私も知っていますよ、ふじ子のお花ちゃん」や「ふじやのケーキで花まつり」などCMやら華子句の果ては、懐かしい歌手、藤圭子の演歌まで飛び出す様。アルコールも入っていないのに腹やかなお花見となりました。

三人寄れば何とかな。と言いますが、「藤の花」から次々と沢山の発想が思い浮かぶ利用者さんとのやりとりは、ほのぼのとした気持ちにさせられ、文殊の知恵の数倍以上のものを得ることができました。

私が子どもの頃は障害者を持った人も同じクラスで一緒に勉強したり、遊んだりしました。障害があるからとか無いとかではなく、色々な人がいるから面白い、同じでないことが当たり前のこと、同じを小さい頃から感じていたことが、思ひやりの心や、寛容の精神が自然と培われていったように感じます。そういう人間関係の面白さや、人生の機微を現在ではなかなか実感できないが、他者へ心を開くこと



広く深い人間関係の構築は、人を成長させますが、耳にして久しい「いじめの連鎖」のような構図は人として断つ勇氣が必要です。自分も相手も優しい気持ち、幸せな心になれる結びつきが大切なことは誰でも、小さな子どもでも知っています。人間は弱いものでも分かっていても、しばしば行ってしまうことです。そして更に悪いことは、それを人のせいにしてたり、環境のせいにして逃げてしまうことです。「分らないから大丈夫」と「誰も見ないから大丈夫」ということはありません。「天網恢恢疎にして漏らさず」「天知る、地知る、そして己知る」なのです。何よりも自分が一番分かっているはずで、最近のネット上の悪質な書き込みなどは、相手が見えない為、怒りや悲しみをぶつけることもできず、極めて陰湿な上な行為です。いじめのような心や精神に受けた傷は深く、なかなか癒されるものではありません。社会問題にもなっているネット犯罪ですが突き詰めていくと、人と人との繋がりや希薄さの問題なのではないでしょうか。今から二十年前、バブル経済の時代に、モノとカネが絶対的な力を持つようになり、人間もモノとカネの力に振りまわされました。間もなくバブルは弾けましたが、モノとカネの力は衰えず現在に至っています。そして、モノとカネの力に振りまわされ、抜かしているうちに、人間として最も大切な何かを失ってしまったような気がしています。

私が子どもの頃は障害者を持った人も同じクラスで一緒に勉強したり、遊んだりしました。障害があるからとか無いとかではなく、色々な人がいるから面白い、同じでないことが当たり前のこと、同じを小さい頃から感じていたことが、思ひやりの心や、寛容の精神が自然と培われていったように感じます。そういう人間関係の面白さや、人生の機微を現在ではなかなか実感できないが、他者へ心を開くこと

私が子どもの頃は障害者を持った人も同じクラスで一緒に勉強したり、遊んだりしました。障害があるからとか無いとかではなく、色々な人がいるから面白い、同じでないことが当たり前のこと、同じを小さい頃から感じていたことが、思ひやりの心や、寛容の精神が自然と培われていったように感じます。そういう人間関係の面白さや、人生の機微を現在ではなかなか実感できないが、他者へ心を開くこと



なく繋がりも欲せず、自分のカラーに閉じこもってしまう人が増えてしまっているようです。

「ヨリを戻す」という言葉があります。ヨリという文字は「糸」に差と響きます。人間の神経や感情は糸の差ほどの細やかなものなので、縁などか。そう思うと、「絆」や「縁」など人と人との結びつきを示す言葉は糸がついていて、細く弱い糸でも、よったり、束ねたりすると、強靱なもの、豊かなものに変わります。一人ひとりの心の糸は細くても、気持ちや寄せたり、たくましくい合わせることによって強くなります。つながり、というものはそういうものだと思えます。

人は繊細な心、強い精神の両方を程よく持たせていると良いのですが、これがなかなか難しいことのようにです。無神経であったり、固太いだけの心根であったり、バランスの悪いこと甚だしい我が身は反省ひとしきりです。繊細だと思っていたのはたまたまの弱さだけ、強い精神は頑固さ故にならぬ様、多くの人間とのふれあいや様々な織りなす人間模様から学んでいきたいものです。

冒頭に記したような楽しい利用者さんとのやりとりも三年目を迎えました。毎日の小さな出来事から人の輪が広がり、色々な話題が生まれるのは集団生活の素敵な一面だと思えます。でも、いままへんしく笑ってばかりではありませぬ。誰かが怒ったり、泣いたり、ケン

カをしたりと腹やかです。色々な人がいて、様々な気持ちがあります。絡まったり、ねじれたりしながらもお互いに心の琴線に触れながら、更に強くなやかな糸で繋がっていきたく願ひします。障害福祉の仕組みが平成十五年度より大きく変わり、十八年度より施行された障害者自立支援法はまだまだ課題が多く、流動的ですが、我々支援スタッフは、時代の流れや制度の移り変わりに翻弄されることなく、隠された使命を全うすることを目指したいと思ひます。

里見理事長が常に口にしています「利用者さんを真ん中にした支援」を心がけ、支援の向こうに笑顔が見られるよう職員一丸となって取り組むと共に、また、更なる飛躍の一年にしたいと思ひます。(小石川福祉作業所 所長)

編集後記  
天災により多くの生命が奪われることもあれば、流行のように次々と自らの生命を絶つ人もいます。今、生きていることは偶然の賜物なのか、必然なのか、生命の尊さについて自分が決めるのか、周囲が決めるのか、と悩むことなく通電電車の中刷り広告を見ながら考える。あと、隣の広告に目を移すと「クリアランスール」のド派手な文字が。ああ、先程までの人生哲学が、お財布経済学に変わっていき、さあ！早く佑啓を仕上げて、買い物に行かなくては。



石渡 恵美